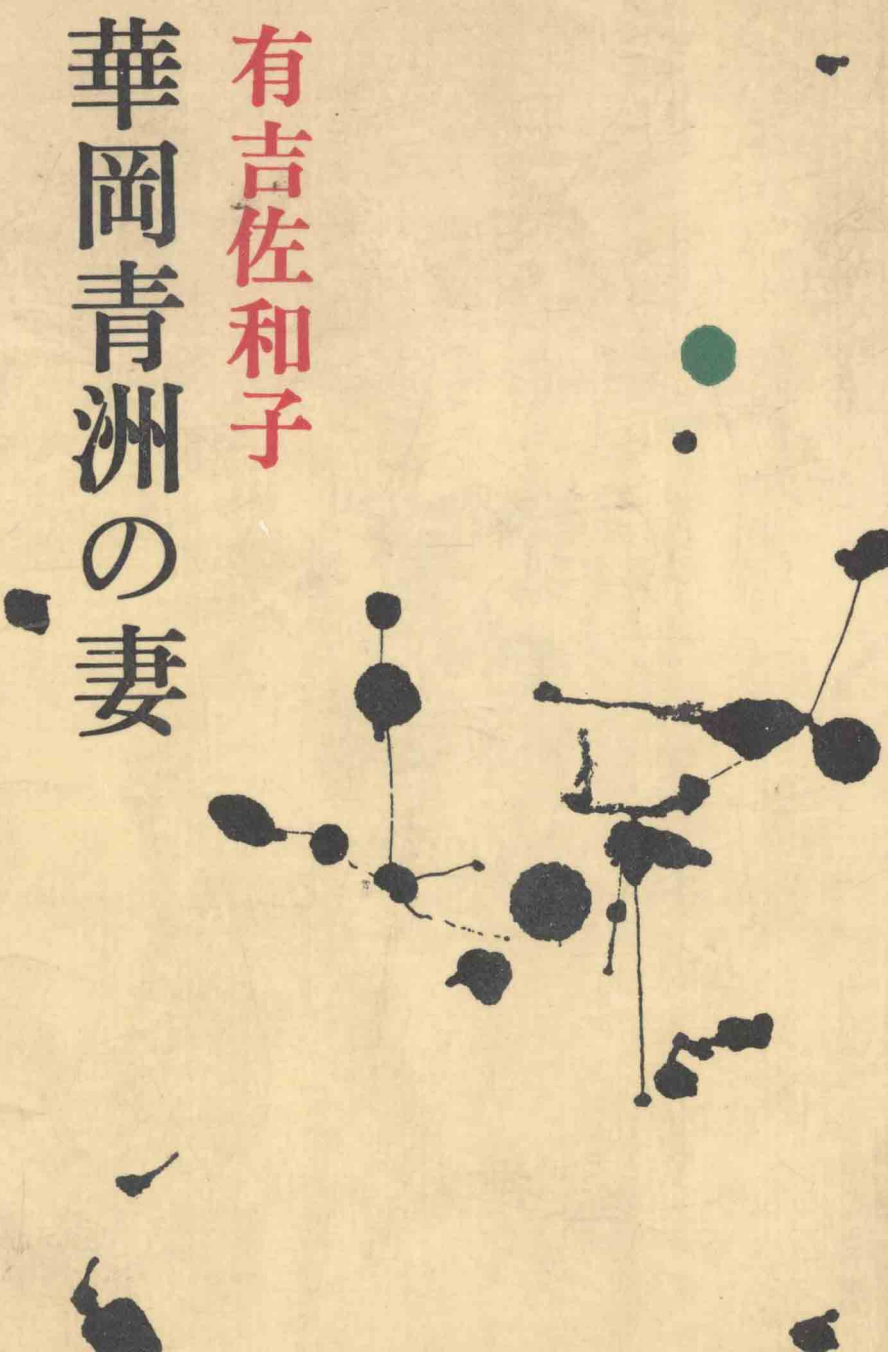
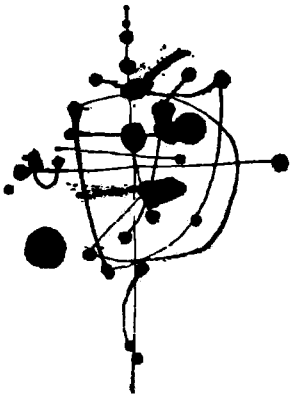
有吉佐和子

華岡青洲の妻



有吉佐和子

華岡青洲の妻



新潮社版

華岡青洲の妻
有吉佐和子選集第十一巻
昭和四十五年六月二十日　発行
昭和四十九年六月十日　十一刷
定価　六五〇円
著者　有吉佐和子
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京〇三(260)一一一一
振替東京八〇八番
印刷　塚田印刷株式会社
製本　大進堂製本所

© by Sawako Ariyoshi, 1970, Tokyo
乱丁・落丁本はお取替えいたします。

目次

華岡青洲の妻　7
赤猪子物語　171
美っつい庵主さん　181
三婆　221
亀遊の死　295
うるし　295

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

華岡青洲の妻

華岡青洲の妻

一

加恵は八歳のとき初めて於継を見た。話をきかせてくれた乳母の民に早速ねだって隣村の平山へ出かけたのは夏で、めざす家の前庭には雑草が生い繁り、気違い茄子の白い花々が暑苦しい緑の中で、妙に冴え冴えと浮んで見えた。それは古ぼけた家の軒からふと外へ出て来た於継の色白な横顔と、あまりにもよく似ていた。

「ほれ、ほれ、嬢さん」

枳殻の牆の前で、民は振返って得意そうに小鼻をひらいてみせたが、加恵は頷くことも忘れて、庭に打水している於継の美しさに見惚れていた。

その話というのは、於継が川向うの伊都郡丁之町の松本家から上那賀郡名手の平山にある華岡家へ嫁いだ経緯である。温暖の紀州は殊に平野から紀ノ川沿いに北上する一帯の村邑を穏やかに豊かなものとしていたから、徳川治政の平和な時代に、草深い名手荘では、村人たちの間で長く話題になるような事件は滅多に起らなかった。その代りに、一つでも起ればこれは消えることなく口から口へ親から子へと語り継がれていく。於継が平山にきたのは宝暦の半ば頃であったから、それからまだ十年そこそこしか歳月は流れていず、話は登場人物が実在しているだけに一層ことあるごとに女たちの口によって繰返され、今では名手荘内で知らない者はいない程になっている。

丁之町の松本新次郎といえば、名手の妹背家とは家格の点でこそ較べものにならないけれども、地主である他に藍屋や染色業へも手を拡げてしかも堅実に取仕切っている評判の高い家であった。於継はその女であったが幼いときから才色の誉れが高かったのを、適齢期に到ってひどい皮膚病に冒され、松本家では金にあかして医者に診せたが彼らは悉く匙を投げた。ところがその話を聞いた華岡直道が紀ノ川を渡って松本家の門を叩き、必ず治癒してみせるがその暁には於継を自分に娶らせてほしいと云ったものだ。松本家としては、あまり評判はきかない田舎医者であったが藁にもすがりつきたい折柄、直道の交換条件を鵜呑みにして治療を任せた。そして結果は、於継が貧乏医者の家に嫁入りすることになってしまったのである。

本来ならば、不治と云われた病を全治したのであるから、それは華岡直道の名医ぶりを伝える挿話になる筈であったのに、そうならなかったのは、直道にかなりの大風呂敷という性癖があって地元では不徳が災いし、この話も彼のためにはあまり好意をもって迎えられなかったのと、もう一つには物語の女主人公として於継が話以上に美しく賢かったからであろうか。その話のおしまいには誰でも、まあ一度於継さんを見ておいなあえ、それはそれは美っついおひとやえ、と云って結ぶのが常であり、そうすると聞き手は忽ち興味を釣上げられて平山まで出かけてしまい、加恵と同じように、実物が想像以上に美しいのに一驚するのであった。

そのとき加恵は八歳だったが、於継はたしか三十そこそこで、その頃の常識では女の盛りを過ぎた年齢であったのに、幼い加恵の目にも於継はそんな年齢を感じさせなかった。夏の盛りに手織の細かい縞木綿をぴちっと着付けていて、締めた細い帯が形よかった。何よりも目の奥に残ったのは、花のように白い肌と、一筋の後れ毛もなく今結いあげたばかりのように艶やかな丸髷であった。肌の白さに強められて髪の色も一層黒々として、青い眉は昨日剃ったばかりの新妻のよ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

うに鮮やかで初々しくさえ見えたのを、加恵ははっきりと覚えている。決して早熟な娘ではなかったのにこんなことを記憶しているのは、それだけ於継が見事だったからだろう。

その日であったか、翌日であったか、加恵は母親にこのことを告げた。悪いことをしたわけではないから隠す必要はなかったし、それに誰かに云わなければ胸に溢れている感動のようなものが治まらなかった。母親は頷きながら娘の話をきいて、於継の美しさには充分同感を示した上で、こんな言葉をつけ加えた。

「美っついこともさりながら、賢い女やというて誰でも褒めんものはないのやして。どのように賢いのやら知らぬけれども、知るひとは皆が皆そない云いなさるえ」

加恵の感動はこのときから憧憬を育て始めた。あれだけ美しい上に、誰もが褒めるというほど賢いのだ。女として、これ以上に理想の在りかたがあるだろうか。加恵の幼い胸の中で於継を崇高なものとしてあがめ尊ぶ気持は信仰に似て齢とともにふくらんでいった。何分にも幼くて、まだ娘心の生れない以前に受けた感動であったから、加恵は同性の妬み心や、自分が決して並外れた美しさも聡明さも持っていないというひけめも覚えることなく、素直に、だから一層烈しく於継を慕っていた。

平山は隣村といっても、市場村の妹背佐次兵衛の女であった加恵には、それ以後於継を見る機会は滅多になかった。それというのも妹背家は近郷の地士頭と大庄屋を代々勤めている名門であり、藩主が伊勢路へ往復するときの宿と定められていたので、通称を名手本陣と呼ばれるほどの家柄だったから、士分の娘が百姓娘のように畝道を駈けまわるような真似は許されていなかったからである。それでも妹背家の家風は堅実で、加恵は読み書きの他に裁縫も掃除の作法も厳しく躾けられた。祝儀不祝儀の客寄せには台所の手伝いも子供の頃からさせられていた。佐次兵衛

も派手な性格ではなかったし、母親は嫁にきてすぐ稽古事はほどほどでいいと気がついたという自分の経験からも、加恵には実際的な教養を積ませようとしたのである。本陣を承っているときには、一品でも娘の手料理を紀州藩主の膳に供させてもらうのが、佐次兵衛夫妻の後の自慢になった。葵の御紋のついた膳部を捧げて殿さまに御給仕するのも、十四歳を過ぎてからは加恵の役目であった。

そういう格別の家にいたから、於継を見かける機会はなかったけれども、於継の夫である華岡直道が妹背家に現われるときには、加恵は用もないのに祖父の部屋に見舞顔で出かけていった。加恵自身は風邪もひいた覚えがないほど丈夫だったから、家の中に病人がでたときでなければ医者の顔を見ることがない。佐次兵衛に家督を譲って隠居している加恵の祖父は、高齢のために屢寝こんでは医者の世話になった。わざわざ平山まで直道を呼びにやらなくても市場村の中にもっと評判のいい医者がいたのだが、隠居は閑を持てあましていて半分は直道の法螺吹話も聞きたくて彼を贔屓にしていたのである。だから他の者が病気のときには市場村の医者が呼ばれるのであった。加恵の祖父以外のもので直道に脈を見せた者はいない。それでなくても直道の本業は外科であった。加恵はかつて医者に興味を持ったことがなかったから、直道が家に出入りしていることも、民の口から物語をきいて初めて気がつき、於継の姿を見て帰ってからは、今度は於継の夫というひとを見たいと希って祖父が躰具合を悪くするのを心待ちにしていた。夏のうちは隠居は元気で、加恵が様子を見に行くと鯉の洗いなどをまばらな歯を見せながらぴちゃぴちゃと舌を鳴らしながら食べていたり、なかなか病気になる気配はなくて孫娘を落胆させた。しかし寒がりの隠居は冬になると寝ていたい口実に病気を装い、すると本当に風邪をひいたり頭痛が起きたりした。華岡直道はそういうとき、自ら薬籠を担いで悠々と妹背家の玄関に現われるのであった。

加恵はしかし待ちに待った華岡直道を見たときは、これが於継の夫かといたく失望した。一筋の乱れもなく結いあげていた於継の丸髷とは対照的に、直道の髪は久しく櫛の歯が通ったとは見えなかった。肌は酒灼けして赭く、大きな唇は上下とも厚く、逞しい歯は乱杭で、あの於継と連ねて考えるには直道は醜く、そして言動に到ってはもう加恵がどういう期待をかけようもないほど粗野であった。大きな桐の紋付を彼は常用していたが、夜はそのまま寝てしまうのではないかと疑われるほど、それはよれよれで古びて穢なく、もう幾年も水を通したとは見えず、つまり紋服の態をなしていなかった。あの鮮やかな縞木綿を仕立おろしのようにぴんと着付けていた於継が、どうしてこういう夫を持っているのかと、加恵は殆ど当惑した。二人を繋げて考えることは幼い娘には難かしかった。

直道の声は大きく割れていて、妹背家の隠居の脈をとるかとらぬうちに世間話を始めていた。世間といっても彼には名手荘などは眼中にないらしく、いつも天下国家の趨勢を論じるのである。隠居もかなりそういう話は好きで、紀州徳川家代々などを論じると深更に及んでも終らないところがあるのだが、それでも古い話は繰返しがきかなくなるのに、直道の話は今日ただいまの天下の趨勢を新しく知識を仕入れてきては喋るのだから、話好きの隠居を圧していた。もっとも新しい知識といっても、江戸から遙かに遠い紀州の、それも片田舎で、あまりはやっていない医家の彼の許に風聞のように伝えられるのは四、五年も昔の出来事であったが、激情家の直道はそれを自分で昨日見てきたように感情を移して話すことができた。隠居は充分心得ているから適当に割引いて聴いている。

「儂は断言しますが医学に於て必ず我が国にも蘭方の時代がきます。これは私が大坂の修業時代に師事した岩永蕃玄先生の口癖やったが、その南蛮流を学んだ儂はこの時代を自分の脈で摑むこ

とができますのや。江戸では山脇東洋先生が刑死体を解剖して以来、今は杉田玄白先生が蘭方を提唱しておられます。脈一つで推しはかる漢方と違うて、これは人間の躰を隅々まで念入りに調べますのや。人体は造化の妙、指一本にも血と肉と骨の他に様々な体液が流れ神経が通っておる。それを綿密に診てこそ診察と云えますのや。医者に名人はござらん、人体悉く解き明かされれば病には正しい処方があるだけですよってにのう。公儀もそれを認めて医術の吸収に本腰を入れるようになっているのは、まことに喜ばしいことです。和蘭陀よりほうるという名医やほんとのう先生が来られてからも、何年になりますか」

直道自身は病人の脈一つろくに診ずに喋っているのであったが、どういう話も末はといえば、

「左様、ほうる先生が来られたのは、後で知れば雲平の生れた宝暦十年でしたのう。後でそれを知ったとき、儂は確信を持ちましたのや。秋たけなわの十月二十三日ですわ、晴れ上っていた空が俄かにかき曇って、やがて眼も眩む稲妻が黒い空を裂いては凄まじい雷を落す。雲平はその最中に生れましたんや。儂はこの腕で取上げて、気がつけばいつか空は明け、鳥が高く飛んでいる。これは麒麟児が生れたのだと儂は大声で叫びましたわ。ほうる先生も日本へ着かれてすぐこの奇瑞に遭われて驚かれたことですやろ。ほうる先生の足がこの国に着いたとき、同時に震も生れ出た。これは間違いのないことやと思いますわ。儂はその日の天気を記念に残すため、震と名付けてすぐ通り名は雲平と定めたのです。ええ名前でしょうがの。雲平は必ず将来は新しい空をひらくに違いないのですわ」

と息子自慢に終るのであった。

加恵にはこの行儀の悪い直道の、齢より更に老けて見える風態から、彼を精力旺盛な老人と思いこんでしまって、そういう子供自身もそぐわないものに聞いた。於継と直道は十四歳の齢のひ

らきがあったのだけれども、妻が齢より若く見え、夫が齢よりふけて見えるためにいよいよそのひらきは大きなものとなって、どう考えても加恵には於継がこの男の妻だとは思えない。

直道は妹背家を訪れるごとに様々な話をして、最後は必ず雲平の自慢で結んで帰るのであったが、その自慢話というのは、自慢の種になるのが不思議なほど愚にもつかない事柄か多く、要するに野心満々の直道が子供にかけた期待がいかに大きいかを示すにとどまっていた。だから加恵は直道の話を幾度きいても彼の息子に格別の興味を寄せることはなかった。それでも加恵は直道が来ると気懸りで隠居の部屋へ顔を出したくなる。直道は滅多に自分の口から妻の話をすることはなかった。あの話は彼が吹聴しなくてもすでに有名であったし、男というものは妻の存在を語りたがらないという通性を持っていて、直道もその点では例外ではなかったのだろう。加恵は於継に縁ある者として直道を迎える気持を持ちながら、いつも期待を裏切られ失望していた。

二

祖父が亡くなったとき、加恵はもう十八歳になっていた。医者好きだったが斃れるまで実は元気だった老人は、死ぬときも脳溢血で潔く死んでしまい、医者の手に長くかかることはなかった。倒れたとき妹背家がまっ先に呼びにやったのは直道ではなくて、妹背家に代々出入りしている他の医者であり、すでにこと切れている隠居にはほどこす手当てもなかった。もう十年も昔から佐次兵衛に家督を譲っていたので、急逝とはいっても何の不都合もおこらず、病みつきもしなかったから、ひとびとは極楽往生だと噂しあった。前の大庄屋の死であったから、葬儀は盛大なものになり、名手荘一帯のひとびとが揃って焼香に来て門前に列をなした。

妹背家の家の中は人を喪った悲しみよりも多くの弔問客を迎える準備で忙しく、手助けの男女がごった返していて、それは決して陰気な光景ではなかった。加恵はもう充分に人の死を悼むことは知っている年齢に達していたのだけれども、祖父の死はまことに呆気なく悲哀に乏しいものだったので、その直後に始まった賑わいの方にやはり気をとられて、しみじみとした悲しみを悲しむには間があるようであった。加恵は絹の喪服を着て、髪型は念入りに結い上げていた。適齢期の娘を人目に多くさらす機会に、親の配慮があったのである。そうして彼女は親しい客の応接に母の後に従って歩き、焼香にきた村人には控えめに会釈していた。

加恵が於継を見たのはこのときが二度目である。直道の方は通夜からずっと奥にきて酒を飲み続けていた。家には帰っていない様子であった。だがむろん於継は夫を迎えにきたのではなく、紬の紋服に朱房の数珠を持ち、焼香の客の群れの中に立っていた。於継の喪服姿は、弔問のひとびとの中で水際立って美しく見えた。それはまるで来迎之図の中の菩薩であった。於継の全身から瑠璃色の光が射しているように加恵には見えた。加恵の視線は吸い寄せられたまま動かずに於継を見守っていた。

於継に見惚れていたのは加恵ばかりではなかった筈である。村祭りなどの集いにも於継は滅多に姿を見せなかったから、ひとびとは妹背家の葬礼の中で彼女を見かけるとすぐに例の物語を思い出し、指折り数えてそれがもう二十年以上も昔のことだと気がつくと改めて於継の若さに衝たれた。もう七人もの子供を産んで、普通ならばそうして四十の峠を越せば世帯繰りに疲れて肌も煤け、躰つきも萎むか弛むかして醜くなってくるものであるのこ、於継は実際より十年は若く見えたし、喪服を着て面伏せにしている横顔は凛として気品を湛えていた。於継の姿に瑠璃色の光背を感じたのは加恵ばかりではなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.